

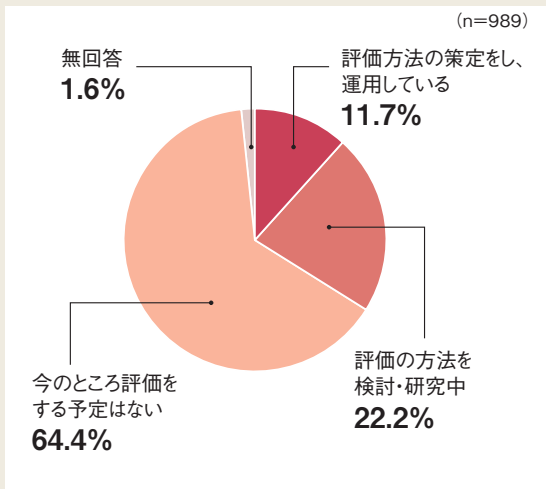
次年度以降の改善につながる「卒業生アンケート」

キャリア教育は推進されているものの、それに対する評価の実施率はまだ低い実態がある。
 そんな中、今後の内容の改善に向けて、
 卒業生に自校の取り組みへの評価を問うアンケートを実施した2事例を紹介したい。

取材・文／永井ミカ

図1 キャリア教育の評価の実施状況

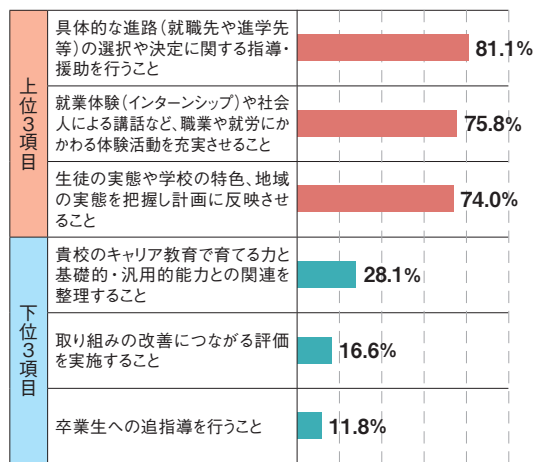
(キャリア教育実施校／単一回答)



※小社「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」より
 (調査時期：2014年10月 調査対象：全国全日制高校の進路指導主事)

図2 キャリア教育の計画を立てる上で重視したこと<抜粋>

(複数回答／n=993)



※国立教育政策研究所「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」より
 (調査時期：2012年10～11月 調査対象：各都道府県、政令指定都市教育委員会所管の公立高等学校)

キャリア教育への評価
 実施率は12%以下

文部科学省が「キャリア・スタートウィーク」を展開して中学校の職場体験活動を推進し、キャリア教育を全国に広めてから2015年度で10年。その間、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と再定義され、推進されてきた。

しかし、14年の小社の調査によると、キャリア教育の取り組みへの評価の実施率はおよそ12%にとどまっている。さらに6割以上が今後も評価する予定はないと回答した(図1)。

国立教育政策研究所の12年の調査でも、キャリア教育の計画を立てるうえで重視することとして「取り組みの改善につながる評価を実施すること」を挙げた割合は、キャリア教育の年間指導計画がある学校の17%であり、「卒業生への追指導を行うこと」について2番目に低い(図2)。

評価が難しい一方で
 第一歩を踏み出した学校も

同研究所は、この調査報告の中で「PDCAサイクル(Plan-Do-Check-Act)の重要性が指摘されているキャリア教育において、取り組みの改善につながる評価を実施することは不可欠である」と

指摘している。
 なかなか評価の取り組みが進まない要因として、前述の小社のアンケートのフリーコメントからは、例えば、客観評価の難しさや学校内のキャリア教育の進展度合いなどの事情が挙げられている。また、キャリア教育を受けた生徒が社会に出た後でないといふ真の評価はできないという声も聞こえてくる。

そんななか今回は、①学校経営計画として評価を長年実施。学校の基本姿勢として、およそすべての取り組みに關しPDCAサイクルを回している事例。②卒業生アンケートを実施。社会に出た卒業生のリアルな声から、今後の評価の設計に着手を始めた事例。この2つを紹介したい。

進路に関する取り組みは効果が上がっているのか 検証するための卒業生アンケートを10年間実施

芝浦工業大学柏中学校高校（千葉・私立）

芝浦工業大学柏中学校高校は大学附属の「貫校」ではあるものの、難関大学をはじめ外部受験者が多い進学校。自主的な学びを目指し、Web教材による反転授業や、チャイムなしの時間管理、手帳指導、目標達成シート、試験振り返りシートなどを導入。常に生徒が自分で課題をみつけ行動し振り返りができるような指導している。

小テストの結果も可視化 効果を検証し次へつなげる

同校では、生徒、教員、学年、学校とさまざまな立場からPDCAサイクルを重視。やりつ放しを防ぎ効果を検証する。例えばこれには、毎週行う小テストの合格率をクラス別に集計したり、家庭学習時間調査なども含まれる。

「小テストの合格率を開示するようになってから、合格率は経年で上昇しています。他のクラスと比べて数字が低ければ、危機感をもってもらおうということだけでも違いますから。また家庭学習時間調査

も、生徒からすれば調査用紙にマルを付けるだけの数分の作業。ほんの少し手間をかけるだけです。結果をもって何らかの指導ができます。1年間知らん顔をして結果が悪かったということがないように、短期サイクルで客観視できるようにしています」と、進路部長の早川千春先生。こうして、学年や学校の様子を可視化し、教員一同、課題を共有できるようにしてきた。

数値が低ければやめる、ではなく 定点観測として活用

卒業生アンケート（卒業前に実施）も10年間ほど続けている。122の設問があるマークシート方式で、進路指導、キャリア教育に関する項目も多い。

例えば、同校では中学2年生から高校2年生まで、毎年全員が「全国中学校高校Webコンテスト」に出場。そのときどきで自分が興味のあるテーマでWebページを作成する。同校ではキャリア教育の環境として位置づけており、アンケートに

「これが将来に役立つと思いますか」という項目がある。昨年度、46%が役立つと思うと答えた。

これについて「半数以下だから取り組みをやめる、というような短絡的なアンケートの使い方はしません」と早川先生。どのコンテンツも、現状の中で最善と考えて実践しているため、この学年は、各取り組みを進路指導に生かしているか、バランスよく取り組んでいるかという観点でチェックする。「続けるかやめるかではなく、効果があるということから始めたのだから、その原点に立ち戻り、きちんと効果を出せているのかを見ていきたいので

教頭補佐・進路部長
早川千春先生



School Data

1980年創立／普通科／生徒数879人（男子618人・女子261人）／進路状況（2015年3月実績）
大学234人、その他54人

す」。進路実績を上げた学年、そうではない学年、それはどこに違いが現れるのかも見る。そして、結果を学年で分析し、全体会議で共有し、改善につなげる。

なお、卒業生アンケートのほか、その保護者によるアンケート、年2回の全生徒対象授業アンケートも実施。外部評価委員会によって、学校評価を外部にも公表している。

卒業生アンケート（抜粋）

- この3年間で「自学自習」の学習姿勢が身に付いたと思うか。
- 今の、本学の進路実績のイメージは何かですか。
- Webコンテストの取り組みは、あなたの将来に役立つと思いますか。
- Webコンテストあるいは課題研究による主要教科学習への影響（悪影響）は？
- クラス担任との個別面談やガイダンスの回数について。
- 進路選択を考える上で、LHRや担任面談、情報・資料提供などが役立ったか。
- 進路を実現する上で、2年次の文理分け、全体のカリキュラムや授業レベル・進度がよくなったか。
- 2年次の大学見学は進路を考える上で役に立ったか。
- 2年次春休み前のOB・OG（進路）講演会は役に立ったか。
- 私立大学・国立大学の模擬授業・説明会には何回参加したか。
- 自分の進路を具体的に考えた時期はいつ頃からか。
- 自分の学習ペースがつかめず、学習がうまくいかなかった時期はいつ頃か。
- 自分の学習がうまくいかなかった理由は何か。

卒業生対象に1月に実施。学校全体に関する46項目、各教科に関する76項目からなる。各項目は「かなりそう思う」「そう思う」「そう思わない」「まったくそう思わない」の4段階評価などで、一部項目について肯定評価率と前年比を学校HP上で公表。

開校以来の卒業生に追跡調査 「卒業後の生徒への励ましにもなれば」

尾上総合高校（青森・県立）

青森県立尾上総合高校は2012年に全日制を閉課し、三部制（定時制）の総合学科となった。昼間（I部・II部）通学か夜間（III部）通学か、3年での卒業か4年での卒業か選べるようになっており、定時制とはいつでも、I部・II部の両方に通い3年で卒業を目指す生徒が多い。キャリアデザイン（産業社会と人間）、総合スキル（文章表現力、プレゼンテーションスキルなど）、課題研究といった学びも準備し、社会を「生き抜く力」を育てている。

総合学科の生徒の10年後を知りたい

同校には課題を抱えた生徒も多く、やり直しを求めて入学する生徒や自己肯定感の低い生徒もいる。入学後、田んぼの中に巨大な絵を描くイベント、田んぼアートを手伝ったり、職業人インタビューなどをしながら地域とつながり、時間をかけてじっくりと「から自分の人生を積み上げていくのが、同校の総合学科らしいキャリア教育だ。」

しかし、14回生までの卒業生を送ってきたなかで、キャリア教育をどう評価すべきかという点ではずっと悩んできた。そこで今年度初めて、8回生までの卒業生全員にアンケートを送った。

「キャリア教育に取り組み中で、生徒に10年後、20年後、どうしたい？」と問い続けています。結果、卒業生はそこにたどり着いているのだろうか。それを検証せずに、今やっていることを正当化できないと思いました」とキャリア推進部の岩淵貴臣先生は言う。

キャリア教育の一定の成果を実感

約600通のアンケートを郵送し、戻ってきたのは30通強。数は少ないが、総合学科の科目選択について「自分で選んだ『責任』を自覚して勉強することができた。その結果として早く進路を意識できた」「将来のことを考えながら、それに応じた勉強ができたのがよかった」などの回答があった。また、現在の仕事や学びにつ

いて「満足している」と答えた卒業生が多く、さらに「満足していない」と答えた卒業生は、「まだ目標を達成していないから」「次にやりたいことがあるから」など前向きなこともわかった。

「データが少ないうえに、現在満足度の高い人が答えているでしょうかから断言はできません。けれども、人生を主体的に歩んでいる卒業生がいることが伝わってきて、校内で共有することができました。こういった追跡調査はどんな高校でも必要なのではないのでしょうか」と岩淵先生は言う。今後少しでもアンケートの回収率を上げるために、「25歳になったら宿題を出す」などと宣言しておくなど、よい方法を模索しているそうだ。また、アンケートを返してくれた卒業生には結果をフィードバックする予定だ。

「アンケートのフィードバックを通して卒業生同士がつながってほしい。それによって励まされることもあるかもしれないと考えています。もちろん結果を在校生への指導に還元していくことも課題です」

キャリア推進部
岩淵貴臣先生



School Data

1999年創立／三部制・総合学科／生徒数201人（男子102人・女子99人）／進路状況（2015年3月実績、定時制・普通科の卒業生）大学2人、短大1人、専門学校5人、就職22人、その他2人

卒業生アンケート

ダウンロード可